

# 川崎の水田雑草群落について

吉田三夫\*

## 1. はじめに

かつての川崎市の沖積地は、新田の開発が行われ、用水路が設けられて海岸近くまで水田として利用される一方、ナシ・イチヂクなども盛んに栽培されていた。しかし、明治末からの工業都市化により、東京湾ぞいの東京・川崎・横浜などに臨海工業地帯が形成された結果、今日では、これらの水田は、限られた地域にしか残っていない。限られた地域とは、川崎市は地理的に東南から北西に細長く、工場や住宅地などからかろうじてまぬがれた、多くは北西の地域にあたる。これらの水田もいずれはなくなってしまうものと考えられる。そこで植生調査を試みた。

## 2. 調査の方法

Braun-Blanquet (1964) の全推定法により、被度・群度を測定した。

被度 調査地内で、それぞれの種がどの位の面積をおおっているか。

- 5 : 被度が調査面積の  $\frac{3}{4}$  以上をしめている
- 4 : 被度が調査面積の  $\frac{1}{2} \sim \frac{3}{4}$  をしめている
- 3 : 被度が調査面積の  $\frac{1}{4} \sim \frac{1}{2}$  をしめている
- 2 : 個体数は多いが、調査面積の  $\frac{1}{10} \sim \frac{1}{4}$  をしめている
- 1 : 個体数は多いが、被度は  $\frac{1}{20}$  以下
- 十 : わずかな個体数

群度 調査地内に、個々の植物がどのように配分されて生育しているか。

- 5 : ある植物がカーペット状に、一面に生育している
- 4 : 大きな斑文状に生育している
- 3 : 小群の斑文状に生育している
- 2 : 小群状に生育している
- 1 : 単独に生育している

## 3. 調査地

- ・麻生区黒川：多摩丘陵の谷戸部の水田・市内では最も広い面積の水田であろう。
- ・麻生区岡上：多摩丘陵の谷戸部の水田。
- ・麻生区早野：谷戸部に近い水田。割に水田が残っている地域である。
- ・多摩区菅稲田堤：ナシ畑や畑の間にわずかに水田が残っている。
- ・高津区久地：JR南武線久地駅近くにほんのわずかに水田が残っている。
- ・中原区下小田中：市街地の猫の額ほどの水田

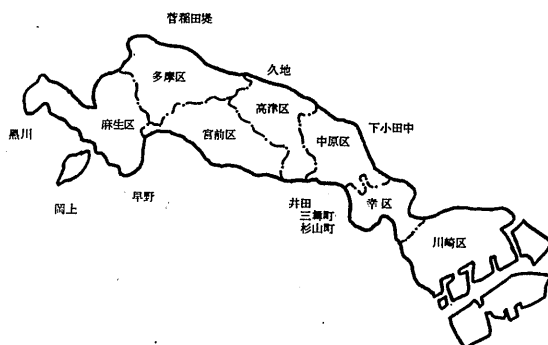


図1. 調査地

\*川崎市青少年科学館





- 中原区井田三舞町・杉山町：市街地の猫の額ほどの水田。



市街地の水田は周囲より一段ひくくなっている。  
中原区下小田中（春）



丘陵地谷戸部の奥まで水田として利用されて  
いる。麻生区黒川（晩秋）

#### 4. 水田雑草群落の特徴

水田雑草群落は、イネの栽培（播種・田植え・結実）に伴って現われる雑草群落である。毎年、定期的にくり返えされる農作業が、本群落を持続させている。従って、構成種は、肥料のために好窒素性の種や水との関係から湿生の種などとなっている。これらの点において、他の群落と大きく異なっている。

水田雑草群落は春季（冬期）と夏期水田雑草群落に分けられる。今回の調査の群落は前者にあたる。春季水田雑草群落の特徴は、稲刈り後に発芽・越冬し、春先から田植えのための耕作前に、つまり短期間に開花・結実する種が構生種となっているということである。このことは、春先、他の雑草群落がまだ冬枯れの色彩をしているのに、水田の雑草は幾分青めいていることからもうなづける。

#### 5. 結 果

表1（P.28,29）の通り。尚、本群落は1972年、宮脇・奥田によって、ノミノフヌマーケキツネノボタン群集と命名されている。

#### 参 考 文 献

- 1) 大井次三郎（1983） 新日本植物誌・顕花篇 至文堂
- 2) 宮脇昭（1983） 改訂 日本植生便覧 至文堂
- 3) 鈴木兵二・他（1995） 植生調査法II 共立出版
- 4) 梶山三千男（1988） 川崎市自然環境調査報告 川崎市教育委員会